

いもせやまおんなていきん

## 妹背山婦女庭訓

〔解説〕 明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあつた作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔鱧七上使の段 あらすじ〕 三笠山の蘇我入鹿の御殿で宴が催されているところへ、藤原鎌足の使者として鱧七（ふかしち）という漁師がやってきます。鱧七は鎌足からの降伏の書状を渡しますが、入鹿は信じず、鱧七を人質とします。鱧七が剛胆にも横になつて寝ていると、槍や毒酒で殺されそうになります。鱧七はまったく動じず大胆に振る舞うのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

## 鱧七上使の段

栄ゆる花も時しあればすがり嵐のあるぞとは、いさ

白雲の高御座。新たに造る玉殿はかの唐くにの阿房殿。

ここに移して三笠山。月も入鹿が威光には、覆はれま

すぞ是非なけれ。腋門の方より宮越玄蕃、荒巻弥藤次。

御前よきまま高う吹く、帆かけ烏帽子も十分に、のけ

ぞり返り入り来たり、

「ホウ仕丁ども朝清めな。イヤなに玄蕃殿、このたび

新たに築かれたるこの山御殿。朝日に輝くところは吉

野龍田の花紅葉。一度に見るとも及びますまい」

「ナニサ〜。イヤモ言語に述べがたみきお物好き。

瑠璃のうつばり、珊瑚の柱、水晶の御簾。瑠璃の障子。

コレ見られよ。飛石は琥珀、砂は金銀、また釣殿に登

り見おろせば、春日の杉も前栽の草びら、若草山、つ

づら山はまき石同然猿沢の池はお庭の井戸に見えま  
する」

と話の尾に付く仕丁ども、

「ア、結構な御普請でござります。さうしてなにや

らふつ〜と好い匂ひが致します」

「オ、その筈、縁板、おぼしまに至るまでみな伽羅と

沈」

「シタリ抹香や匏屑とは違つた物ぢやのう。又次」

「サイノウ、またお学問所は唐を写して唐木ぢやげな

の」

「ハアン、その唐木とは何々ぞ」

「オ、まづ花梨」「フン」

「紫檀」「フン」

「黒檀」「ホイ」

「たがやさん」「ホイ」

「うらやさん」「ホイ」

「当卦本卦」「や」

「手の筋」「や」

「男女相性」「や」

「墨色の考」「コレ〜」

「失せ物、待ち人」「コレ〜〜」

「書き判の善悪」

「ア、コレ〜、そりや山御殿ではなうて山伏ぢやぞ

や」

「サア王様もこの山で寝やしやるによつて山伏ぢや」

「エ、人を嘲弄するかな」

「イヤ長老とは坊主のことか」

「イ、ヤ女子の事ぢや」

「そりや女郎ぢや」

「イヤ如露とは花に水かける物ぢや」

「エ、どう言やかう言ふと、なんぼ貴様がくずなの弁  
でもおれにや敵はぬ」

「ヤイ富楼那の弁ぢや、くずなどは魚ぢやわい」

「イヤくずなぢや」

「イヤふるなぢや」

「くずなぢや」

「ふるなぢや」

「くずなぢや」

「ふるなぢや」

「くずなぢや」

「ヤイ〜騒がしいそりや何事、清めしまはば早く下  
がれ。みな行け〜」

と追立てやり

「アレお聞きあれ弥藤次殿、我が君この殿へ御移りと  
見へ、物の音近く聞え申す」

「いかさま、さよう」

と威儀つくるひ厳重にこそ、控へ居る。花に暮らし、月に明かし、酒池の遊びに酔ひ疲れ、御殿々々の通ひ路も数多官女が道楽に、君の機嫌をとりかふと、調ふる笛やしやう、ひちりき、大鼓の音も鶏徳に、己が不徳を押し登る。うんげんの深縁、蜀錦のしとねの上、むんずと座せし有様は、実に類ひなき栄華の殿。玄蕃、弥藤次頭をさげ、

「先だつて卿上雲客たちより君の寿を祝し申されし数の島台、ソレ女中方、叡覧に供へられよ」

『アッ』と答へて持ち出づる、思ひ思ひの飾り物。

「なにがな君が寿を祝ふ鶴亀松竹の影は千尋の深緑。松と鶴亀合はせて見れば一万二千の齡を君に譲り寿ぐ蓬萊山。さてまた次の島台は、周の帝の寵妃仮りの情のおとぐさ。実に寵愛の色菊や、葉毎を染めしそ

の筆の命毛長き八百歳。老いせぬや、老いせぬや。葉の名をも菊の酒、酌めども尽きぬ泉の壺。殿上人の方々より御祝儀なり」

と相述ぶる。一しほ興に入鹿が悦び。

「才、百司百官より下万民に至るまで、我が在位長かれと願ふことめい／＼が身の冥加なれば、猶ばんぜいを唱へよ」

と高慢我慢のみことのり。『はっ』と兩人階下にひれ伏し、

「我われは申すに及ばず、民百姓も野に手をうつて舞ひ楽しむ。誠に戸ざさぬ御代と申すは今此の時に候」と滅多に追従。猩々の人形に見惚れ官女たち、

「コレ／＼この猩々が手に持った酌盃も取りはづし、壺にはまことのみきを湛へた。これで御酒宴始めうか」

「いかさま。それはよい御慰み。サア／＼早う」

と取りどりに手まつ遮る盃の、廻れや／＼万代も尽き  
じ、尽きせぬ歓樂の興を催すその所へ

「ものまう、頼みませう」

とどつてう声。ばちびん頭の大男。御殿間近くぼつか、  
ぼつか、ぼつか、ぼつか。着たる木綿の長かみしも。  
糊しやきばつて立ちはだかり。

「エ、入鹿殿はこゝぢやな。内になら逢はして下んせ」  
と木で鼻くゝるむくつけ詞。宮越、荒巻目にかど立て、  
「ヤア何奴なれば、君の御前ともはばからぬ馬鹿者め、  
すさをらう」

ときめ付くる。

「イヤ俺や。難波の浦の鱧七と云う綱引きでござんす  
が、いつやらからこつちの方へ宿替してこんしたお公  
家どの、鎌きりのだいしんから雇はれて来た使でござん  
す」

といふを、遙かに見下ろす入鹿。

「ハテ心得ぬ。その鎌足めは首陽山のむかしを学び、  
跡を隠せしと聞きしに、さては難波の浦に在りけるよ  
な。普天の下、率上の浜、王地にあらざる所なければ、  
今日まで飢えにも臨まず健固にをりしは我が恵みな  
らずや。それを思はばとくにも参り恩を謝すべきのと  
ころ、使を立てしは緩怠なり」

「エ、それおれが知つた事かいの、かう見たところが  
余程短気者ぢやわいの。しかし喧嘩はこなんの様にこ  
つきで行くのが徳ぢや。鎌殿も一旦は言ひがかりて、  
てつぱつて見ようと思はれたさうなが叶はぬやら、ど  
うぞおれに往て挨拶してくれてて、それは／＼きつい  
弱いいの。大概な事ならもう了簡してやらんせ。懇ろ  
な中は得て心安立て、間違ひがあるものぢやてのう。  
コレ仲直りの印ぢやてて、酒一升おこされた」

と刀の提げ緒にぶらぶらと結びし徳利。きつと目を付  
け

「未だ日本に渡らぬ兵器唐土にありと聞く。飛び道具  
のたぐひなるか。何にもせよ怪しき物を所持せしぞよ。  
かたがた油断致すな」

と眉をひそめて身構へたり。

「エ、とっけもない。とつくりと見やんせ。酒ぢや酒  
ぢや。コレそこなお手代衆。早うコレ、進ぜさんせ」

「イ、ヤ善悪知れざる鎌足より差し上げし酒ならば、  
毒菓仕込みあらんも知れず。奉る事罷りならぬ」

「エ、まはすわく。どれおれが毒味してやろ、茶碗  
はないかえ、そんなら赦さんせぢきやりぢや」

と言ひつゝ徳利の口から口。

「オ、よい酒ぢやになあ。これを飲まぬといふことが  
あるかしらぬ」

と振つて見て、

「ヤア、南無三。みな飲んでしもた。エ、ひよんな  
事してのけた。ヤコレひよつと鎌殿に逢はんしよと  
ま、おれが飲んだと云はずに、よう届いたと礼いうて  
下んせや」

とがむしやな様でも正直者。真面目になつて気の毒顔。  
「ア、まだ何やらことづかつて来たが落しはせぬか」  
とふところ探し、

「オットあるわく、サアこれ見やんせ」  
と一通を渡せば、弥藤次押し披き、

「ナニ、我れ不肖たるによつて、暫く心を惑はずと  
いへども、いま一天四海御手の内に落ち入る事、正し  
く天の譲り給ふ万乗の御位、入鹿公に背くは天に背く  
と同じと先非を悔いてこゝに降参を乞ふものなり。い  
まより臣下に属するのしるし。君の齢を東方朔にたと

へ、この桃花酒を以て御寿を祝し奉る。内大臣藤原の鎌足謹んで申す」

と読み上ぐる。

「ハ、ハ、なまくら者の鎌足め。臣下とならんなどとは、イヤしらじらしき偽り奴」

「なんぢや、鎌殿を嘘つきとは、何ぞ確かな証拠がごんすか」

「ヤア小ざかしき証拠呼ばはり。彼れが心腹いうて聞かさう」「ドレ聞きませうか」

「まづ、この入鹿を東方朔に譬へたるが野心の証跡」  
「そりや又なじよに」

「オ、昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度実を作る桃をみたび盗んで喰ひし故九千年の齢を保つ。桃に百の縁をかたどり、もしき百官を手に入れし入鹿を盗人なりといはぬばかりの底巧み、憎

つくいやつ」

と居たけだか。

「イヤ／＼それや無理ぢや、無理ぢや」

「ヤアうず虫め、何を知って小癩やつ」

「イヤ何にも知らんけど、代りになつて来た俺ぢやによつて一番いふのぢや」

「オ、鎌足が代りならば、これをも代りに試みよ」

と、そばなる島台押し取つて、眉間へはつしと打ち付くる。台は微塵に飛び散れど、びくとも動かず。

「ア、好い加減にだけさしやれ。その厄払ひの代物。東方朔とやらに譬へたというてごうわかすのか。年に

あやからんせとこそ書いておこさしやつたれ、盗人と書いぢやないぞや。それにそちから色々な講釈を付けて盗人せんさく。知った同士は涼しいとやらで、盗人の覚えがあるかして今の投げ打ち。ア、こなんは正直

な人さんぢやと世間の噂。見ると聞くとで大きな違ひ  
マアそんな盗人と鎌どんを懇ろには俺がさすまいわ  
いの。じんたいにも似合はぬ事さんすの。よもやさう  
ぢやあるまいかの。ただし覚えがござんすか。イヤさ  
うかいの」

と文盲だらけも理屈は理屈。

「どうじゃいのくどうでこはる」

とやり込むれば、邪智の入鹿もにが笑ひ。

「ハテロがしこく言ひ曲げしな。うい奴、でかした。

その褒美には鎌足が実否を正すまでおのれは人質。最  
早や籠中の鳥同然。帰る事はならぬと思へ。ヤアく  
玄蕃、弥藤次、いざ萩殿にて天盃をめぐらさん。来た  
れや」

と引き連れて帳台深く入りにけり。

「ア、コレくおれを質に取らしゃると、着物や道具

と違つてしろものが飯喰ふぞや。しかしあのごうはら  
では大抵では喰はしをるまい。オ、空腹に今の酒でよ  
つ程酔が来たわい。ドリヤ何処でなと一寝入りやつて  
こまそ」

と伸び上がり

「エ、腰が重い筈よ。この大小。らつちもないものを  
差さしておこして、あた面倒な」

と縁板へぐわたりと、鳴るは合図かと。突き出す鎗は  
しのすすき。構はずころりひぢ枕。不敵なりける男な  
り。御所より外へ咲き出でぬ、若き御達が入りかはり  
男見に来る愛想には、お茶よ、お菓子よ、煙草盆。銚  
子かはらけ持つて出で。

「コレそな人は何御用でお召寄せありしは知らねど、  
さぞ待ち久しう気もつきよう。九献一つ」

と差し置けば、からだ寝返り、腹ばひに頬杖つくづく



打眺め、

「フン貴様は誰れぢや」

「オ、我れわれは上様の身近く召さるゝ女ども」

「何ぢや短い女子ぢや。ドレ／＼立つて見い／＼なるほど。どれもこれもよう煮え込んだものぢや。わいらはこゝな飯焚ぢやな。テモけうな前垂しているな」

「エ、つがもないざればみごと。わしらを問ひやるそなたの名は」

「オ、鱧」

「ナニ鱧とは」

「ハテ商売の夜網に出りや、沖でも磯でも行き当りによう寝る故に鱧七といふ漁師々々」

「ヤア料紙とは何ぞ書いてたものか。それならば必ず絵や歌はいやぢやぞや。いま難波津で持て囃す、歌舞伎芝居のその中でもよう聞き及んだ文七や八蔵の

紋ならば書いて欲しい」

としどもなき。桜の局すり寄つて、

「さうして下々は皆そなたの様な男かや。よい男もたんとあるである。地下の女子はうらやましい。芝居は見次第、好い男は持ち次第、ほんにまたこの御所女には何がなる。見るも見るも冠装束窮屈で急な逢瀬のその場でも、衣紋の紐よ、上帯よ、解くかほどくか、大抵では下紐迄は手がとどかず、ついその内には花に風月に叢雲さはりが出来て、本意ない別れをするわいの」といふさえ顔に紅葉の局。

「中将や小将あたりで恋すれば、あのおいかけが邪魔になる、尻目づかいは出来ぬ／＼。その上悟気いさかひもこつちからは檜扇で叩けば、あつちは笏でとめ、つつぱりかえつていきつたばかり。いらうても見ぬ逆ほこの雫情も受けて見ず、しんき／＼で暮らそより、

いっその事に玉の緒も絶えなば絶えたがましである。

もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」

と鱧七にひしと二人は抱き付く。びっくり敗亡、ごう

煮やし、

「エ、けたいな術妻めら、あっちへきり／＼うせあがれ」

とけんもほろろに言ひちらされ、

「さつてもすげない恋しらず。玉の盃底ぬけ男。不骨

者よ」

と不興して、本意なく奥へ入りにけり。あたり見廻は

し長柄の酒。庭の千草にさら／＼と漉ぎかくれば、忽

ちに葉立ち変じて枯れしぼむ。

「ハ、ハ、ハ、フ、ハ、ハ。最前の鎗といひ、またぞろやこ

の毒酒。ハレヤレきつい用心」

と猶打ち見やる庭先へ、弓と矢つかひ、ばらばらばら、

追取りかこませ宮越玄蕃。

「いかにしても心得ぬつら魂。尋ね問ふべき仔細のあれば引つ立て来よとの論言なるぞ。早く参れ」

「オ、呼びにごんせいでも行くのぢや。かりそめにもびこ／＼と、ちよつとでもさはるかいな、腰骨踏み折り疝氣の虫と生き別れさすぞ。ヤコレ家来どもさん、わる様たちもその鳥おどし放すが最期、取つ掴まへて首引抜き、かたはしからぬたにするぞ。ヤどりや、おれから先へ行きやんしょ」

と事とも思はぬ大胆者。胸の強弓矢ぶすまを引明け  
(てこそ入りにける。)